

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02138

研究課題名(和文) 初期及び盛期ゴシック聖堂における総合的展示プログラムの成立と展開

研究課題名(英文) Formation and development of comprehensive exhibition program in the early and high Gothic religious architecture

研究代表者

木俣 元一 (Kimata, Motokazu)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：00195348

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：聖堂などの建築では、その空間に配置された美術作品や聖遺物をはじめとする様々な事物によって構築されたネットワークによって、その場を訪れる信徒を絡め取り、その身体や視線を誘導するダイナミックなプロセスを通じ、新たな思考や発見を促す展示プログラムが重要な役割を果たした。こうした展示プログラムでは、諸要素の空間的布置、形態的アナロジー、可視性と不可視性、物質性などの、キリスト教美術が伝統的に練り上げてきたリソースを活用する視覚的レトリックが見る者に力強く働きかける。

研究成果の概要(英文)：In an religious architecture such as the Gothic church, played an important role the networks constructed by various things such as art works and relics arranged in the space, which intertwine viewers visiting the place, guide his body and gaze through the dynamic process, and induce a new thought and discovery. In such an exhibition program, viewers are strongly encouraged by visual rhetoric using various resources traditionally devised by Christian art such as spatial arrangement, morphological analogy, visibility and invisibility, material properties, etc.

研究分野：美術史

キーワード：美術 ゴシック 聖堂 展示 図像 キリスト教 レトリック タイポロジー

1. 研究開始当初の背景

本研究で対象とする聖堂空間を移動する観者によるイメージの動的認識や演出プログラムに関連する研究は主に国外で推進され、とくにイタリア・ルネサンス美術に関するジョン・シアマンの著書(J. Shearman, *Only Connect...: Art and Spectator in the Italian Renaissance*, 1992)で、観者の視点を組み込む作品解釈が重要な成果を挙げた。シアマンが序論で述べるように、こうした発想の起源はキリスト教中世にあるが、中世については典礼と建築・美術の関係を中心に考察がなされてきており、例えば C. Hourihane, ed., *Objects, Images, and the Word*, 2003 では、主として典礼において使用された式文の観点から、聖堂内に設置された事物やイメージの関係を考察する。近年刊行された N. Zchomelidse, G. Freni, eds., *Meaning in Motion*, 2010 では、典礼に重点を置きつつもそれに限定されず、観者や作品自体における運動性を視野に入れ、宗教美術の考察にこれまでない方向性を示す新たな試みとして注目される。また、N. Rowe, *The Jew, the Cathedral, and the Medieval City*, 2011 では、大聖堂外壁の高所に設置された彫像と、市民の視線の関係が論じられる。さらに、Ph. Helas, G. Wolf, *Die Nacht der Bilder*, 2011 では、キリスト・イコンの行列が、ローマの都市空間内を移動し、そこに残存する古代ローマとキリスト教中世の記憶と場所を統合することで、宗教・政治・社会的諸領域における都市共同体の調和や一致を媒介する過程を考察するという新たな関心の所在が示されている。

代表者は、これまでの研究において、シャルトル大聖堂の内陣において、主祭壇で執り行われる聖餐の秘跡に関わるキリストの受肉や贖罪を解釈する諸主題が内陣を囲むステンドグラスに多数存在し、主祭壇も含めて視線によって相互に関係づけられたことを指摘した(cf. 木俣『シャルトル大聖堂のステンドグラス』, 2003)。また、パリ、サント＝シャペルの内部空間に設置された聖遺物容器とステンドグラスの図像構成・物語叙述との関係や、サン＝ドニ修道院聖堂における聖人のシュラインや祭壇などの配置と典礼の関係を、キリスト教会、国家、都市、修道院等の共同体が救済史に参与する過程と集団的記憶の形成及び保持という視点から考察してきた(cf. 木俣『ゴシックの視覚宇宙』, 2013)。

以上のような研究成果を踏まえ、初期・盛期ゴシック聖堂に焦点を絞り、個別の事例研究をさらに発展・深化させると同時に、扱う研究対象をいっそう拡大することで、この現象の生成と展開を総合的に解明しゴシック美術及び西洋中世美術の理解を高度化する必要性を痛感したため着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、初期及び盛期ゴシックの聖堂において実践された視覚的対象の受容という局面で、外壁、ファサード、扉口、内部に設置された彫刻、壁画、モザイク、ステンドグラス、墓廟、祭壇装飾、聖遺物とその容器、銘文等の多種多様なイメージ及び事物を、観者が建築空間を移動し視線によって走査して相互に関係づけることで形成される動的または静的認識の内容と形態について、個別事例研究により実作品や歴史資料に基づきその「演出」の実践を詳細に明らかにすることを通じ、こうした場において編成される各要素の主題、構成、物質的・形態的特質、由来、様式、設置状況などが観者の認識に与する様態に着目することで、静的な主題体系のみに還元されえない総合的な「展示プログラム」の内実を明らかにするとともに、ゴシック建築及び美術の展開を包括的に理解し個別研究にフィードバックするための新たな理論的枠組を提案することを目指している。

3. 研究の方法

初期ゴシックの代表的作品として、サン＝ドニ大修道院聖堂を対象とした現地調査及び文献資料等の分析を以下のように実施する。(1)1140年頃改築の内陣について、現存する建築的要素の調査や、シュジェールが残した詳細な記録及び先行研究に基づき、ステンドグラス、祭壇装飾、十字架、シュライン等新旧の多様な視覚的要素によって編成されたネットワークの再構成を試みる。(2)1144年6月11日の献堂式の記録から当日の典礼を再構成し、各視覚的要素に関する説明・銘文とともに、上述の展示プログラムと対応させ、各要素の主題、構成、媒材、由来、来歴、様式、設置状況などが観者の認識に与した様態から、企図された展示プログラムについて考察する。

初期ゴシック及び盛期ゴシックの代表的作品として、シャルトル大聖堂を対象とした現地調査及び文献資料等による分析に着手する。(1)西正面「王の扉口」に関して、側壁に設置された人像円柱とその間に並ぶ装飾小円柱、上方の柱頭フリーズ、テュンパヌム、アーキヴォルト等が形成する彫刻群について、扉口を通過しようとする観者の視線に対する展示プログラムの観点から考察する。(2)西正面「王の扉口」と上方に設置されたステンドグラスとの対応に関して、ファサードの壁体の表面下部にある開口部(扉口)周辺に配置された彫刻群と裏面上部にある開口部に配置されたステンドグラスについて、上下に並ぶ3つの開口部の対応、異なる媒材の対比、主題の照応関係といった観点から考察し、ゴシック聖堂の内部と外部の関係を分析する。(3)大聖堂南北正面の扉口及びステンドグラス(13世紀初頭から前半)の対応関係を展示プログラムの観点から考察する。(4)交差部東端に設置され近世に破

壊された内陣障壁(jubé)が堂内の観者に与えた効果を、障壁を飾る「キリスト幼児伝」を主題とする浮彫群、中央の開口部を介して得られる内陣の典礼をはじめとする景観、内陣周歩廊と高窓に設置されるキリストの受肉と贖罪と結びつけられるステンドグラスとの関係等の観点から考察する。(5) 側廊と内陣周歩廊に設置される地階レベルのステンドグラスに関し、移動する観者が隣接する窓や対面する側にある窓を相互に関連づけて受容する際に得られる認識の様相を、大聖堂を囲む都市空間、南北正面扉口彫刻とバラ窓も含む主題的な関係性、聖堂内各部の祭壇に設置された聖遺物、これらの聖人に対する典礼に加えて、幾何学的構成と分節システムなどの対応性等の観点から考察する。

ストラスブル大聖堂南袖廊を対象に現地調査及び文献資料等による以下の分析を実施する。(1) 南袖廊正面外壁全体に渡って設置される彫刻のうち、上部に位置する彫刻群と下部の扉口彫刻群の対応関係や窓や扉口が2つの要素を左右に対置して構成される点について考察する。(2) 外壁の彫刻と左右のバラ窓との関係、南袖廊内部に配されたキリストの再臨を主題とする彫刻とバラ窓の関係、内陣に設けられた障壁と内陣の主祭壇で執り行われる聖餐との関係について、とくにバラ窓のデザインのモデルを提供したと考えられる写本挿絵との比較を通じ、扉口を通過して内部に至る観者に向けられた演出効果を中心に考察する。

サン＝ドニ、シャルトル、ストラスブルを対象とした考察で浮かび上がった展示プログラムの内実を踏まえ、個別研究にフィードバックするための新たな理論的枠組を提案する。(1) 多種多様な視覚的対象を編成してネットワークを構築する展示プログラムというものを想定できるか。またこのプログラムを統括する原理として何が考えられるか。(2) こうした展示プログラムを機能させるために用いられた演出と手法にはいかなるものがあるか。(3) 1世紀以上に渡る初期ゴシックから盛期ゴシックへの展開において、こうした展示プログラムは、何を起源とし、いかなる段階を経て発展を遂げたか。(4) このような展開において、聖堂建築及び彫刻・ステンドグラス・貴金属工芸等といった各種の媒材の間で、相互に連動し干渉し合うような関係性を想定できるか。(5) 建築や各種媒材の歴史記述のあり方にいかに反映させうるか。(6) このような展示プログラムの様相を、キリスト教会における宗教的/社会的実践においてイメージその他の視覚的対象が担った多様な機能といかに接続するか。

4. 研究成果

ゴシック聖堂において、周囲の都市空間、外壁、ファサード、扉口、内部に設置された彫刻、ステンドグラス、祭壇、聖遺物とその

容器、磔刑像、墓廟といった多種多様な視覚要素によるネットワークが編成される。このネットワークは、主題の体系性に基づくスタンディックな図像プログラムに加え、都市空間や聖堂建築により課される身体の動線や視線の方向づけを通じ、観者において成立するダイナミックな認識の過程を前提とする。こうして編成され、関連づけられる視覚的要素の主題、構成、物質的・形態的特質、由来、様式、設置と利用の状況などが観者の認識に作用する様態に着目することで、複合的・総合的な展示プログラムが浮かび上がる。多種多様な要素を操作の対象とする展示プログラムという概念を用いることで、聖堂を飾る美術を単に「文字を読めない人々の聖書」とする理解とは異なる枠組を提示したい。ゴシックに限らず、キリスト教の聖堂空間において、超越者との交わり場を生み出すために錬成された展示プログラムが発動する重要な契機として、典礼や行列などの儀式がある。典礼で用いられる祈りや引用の言葉、音楽、身振り、祭具、祭服が、展示プログラムを構成する多様な要素とともに、その場に参加する者に働きかける。典礼は行為と言葉による一種のレトリックとして捉えられ、典礼が行われる建築も空間的レトリックとして、さらに建築に設置される美術やモノも、このようなレトリックとの関係で理解された。展示プログラムは、行為、言葉、空間、視覚的イメージ、そしてモノを構造化するレトリックと深く関係する。中世では建築が提供する空間的枠組が、記憶や思考に関わるマトリックスを形成し、内面化されたことも忘れてはならない。典礼を理解する鍵となる考え方は、地上の教会は、天上の教会を映し出すイメージだというものである。2種の教会が最大限に一致するのは、聖餐の秘跡に関わる典礼を執り行う時である。典礼は、超越的存在と人を結ぶだけでなく、それが行われる場、あるいはそれを越えたより広い領域と超越的空間との境界を無化する。

地上と天上の教会の一致に関し、初期ゴシックを代表する作品であるサン＝ドニ大修道院聖堂を取り上げる。この聖堂は、人像円柱をそなえた西正面扉口、交差リブヴォールトを架構し、複雑な図像体系に基づくステンドグラスを連続して配置した明るく広々とした内陣周歩廊の空間構成により、大修道院長シュジェールという革新者の下でゴシック芸術が誕生した地とされてきた。しかし、近年の研究では、初期キリスト教・古代末期、メロヴィング朝等の初期中世といった過去への志向性の点で、従来の革新性に偏向した見方を相対化し、ゴシック様式の形成を総合的に理解しようとする傾向が見られる。聖堂全体に及ぶ様式史的に雑多な要素から編成された展示プログラムに整合性を与える契機として、典礼という観点からシュジェールの意図を理解する必要がある。大修道院長シュジェールが取り組んできた聖堂の整備事

業は、1144年6月11日の献堂式によって完成する。聖堂内部全体に配置された20を数える多数の祭壇が、参列した高位聖職者らによって同時に聖別された。シュジェールの追求した典礼と、そのために必要な道具立てとして、聖遺物、聖遺物容器、祭壇、祭具、十字架といった諸要素が、ステンドグラスなどの天上的素材で飾られた建築空間の中に、しかるべき形で配置されなければなかった背景、そして人々の内面にいかなる認識が形成されたかが示されている。

初期キリスト教時代から、祭壇は、一種の墓として聖遺物を収容する聖人信仰の中心であるとともに、食卓として聖餐を執り行う典礼の中心であり続けてきた。これら2つの様相は、祭壇において切り離しがたく結合する。そのため祭壇周辺の装飾も、典礼と聖人信仰といういずれかの機能だけに対応することなく必ずと両義的となる。建築空間において、様々な地点に設置された祭壇、聖遺物、イメージによって形成される複数の祈りの中心があり、これら一連の中心に沿って、認識を活性化する展示プログラムが編成され、内陣や聖堂全体が統合される。シャルトル大聖堂には、かつて堂内全体にわたって多数の祭壇が設置されていた。これらの祭壇と、そこに置かれた聖遺物は、ステンドグラスなどの美術とともに緊密なネットワークを形成していた。内陣の主祭壇後方に設置された「聖なる遺物容器」には、シャルル禿頭王が大聖堂に寄進した聖母マリアのトゥニカという重要な聖遺物が納められていた。内陣周辺には、南袖廊をはじめ聖母に捧げられた祭壇が2つ置かれ、1194年の火災で焼失したとされるロマネスクの大聖堂に由来する聖母を描くステンドグラスが配される。北正面のバラ窓や扉口彫刻では、聖母の母親である聖アンナにもテーマが展開する。内陣を囲む障壁が設置される以前は、主祭壇の向こうに、大聖堂東端部のステンドグラスが見え、主祭壇にとって一種の祭壇画のような役割を果たした。このステンドグラスに配された「最後の晩餐」の場面では、パンとぶどう酒を自身の身体と血であるとイエスが宣言し、食卓を囲む使徒たちに、これを記念するため将来にわたり繰り返すように命じており、使徒の後継者である聖職者が前方の主祭壇を中心に執り行なう聖餐をイエス自身が制定したという歴史的根拠が提示される。一度限りで過ぎ去った歴史的時間が、典礼によって反復される循環的時間を介して、信徒が属する現在と結ばれ、多様な時間が重層する。他方、主祭壇の真上に位置する高窓のステンドグラスでは、「受胎告知」や「モーセと燃える柴」、旧約の預言者など、聖母におけるロゴスの受肉に関わる諸主題が配され、下方の主祭壇後方の容器に納められた聖母の聖遺物、さらに主祭壇で執り行われる聖餐で用いられる聖体のパンと、「天から降ってきたパン」であるキリストの身体との関係が提示さ

れる。聖母の母胎における受肉と主祭壇を中心に行われる聖餐の主題は、内陣前方に設置されていた障壁の浮彫装飾、そして西正面を今も飾る浮彫やステンドグラスでも取り上げられる。同じ主題が重複するのは、聖堂全体に渡る図像プログラムとして整合性を欠くと考えられたこともあるが、聖堂内外の空間を移動する者を想定し、重要な主題を一貫して際立たせようとする展示プログラムの存在を明らかにする。

ストラスブル大聖堂南正面扉口の彫刻群、その上方のステンドグラス、内部にある支柱に設置された「キリスト再臨」をかたどる彫刻は、展示プログラムという観点で非常に興味深い。2つの入口、左右両端にあった有名な「キリスト教会」と「ユダヤ教会」の擬人像、「聖母の死」と「聖母戴冠」を表すテュンパヌム、上部のステンドグラスに至るまで、すべて左右でペアをなし互いに接するという、聖堂のファサードとしては例外的な形で配置される点に注目する。南正面内外に配置される彫刻とステンドグラスが、12世紀後半に同じ地域で制作された『ホルトゥス・デリキアールム』写本をモデルとすることは、すでに指摘されている。南正面の特異な構成は、『ホルトゥス・デリキアールム』のフォリオ67の両面に描かれた2つメダイヨンと同様の考え方に基づいており、旧約と新約の対立ではなく、一体性を表すと考える。内部に入り、南正面を裏から見ると、2つの円形の窓の図像が上述のメダイヨンと類似する構成をそなえ、祭儀という主題を通じ旧約と新約の一体性を示す。写本においては、同一フォリオ両面に配され表裏一体をなしつつ、同時に見ることでできない2つのメダイヨンの関係性が、読者のページをめくるという行為によって、旧約の幕屋で聖所と至聖所を隔てるカーテンをくぐり抜ける過程とのアナロジーで、次元の異なる空間への移動として読者の認識を誘導していた。他方、ストラスブル大聖堂の建築空間では、壁面に2つのメダイヨンを並置する形で展示プログラムが形作られる。写本という媒体では、擬似的な空間的レトリックに沿って展示プログラムが構想されたが、大聖堂の建築空間では、同じ要素が別の原理による配列へ移し替えられる。内陣の主祭壇を中心に執り行われる聖餐は、2つの円形窓で扱われる祭儀のテーマ、そして「再臨」を主題とする柱の上部で磔刑の傷口を見せるキリストと関係づけられるよう意図されていた。聖週間と復活祭に際して、南袖廊に設置された聖墳墓を模す小建築を用いた典礼が実施された。キリストの復活は、典礼において伝統的に再臨と結びつけられた主題であり、さらに終末における死者の復活と救済を保証する出来事であった。

ゴシックと名付けられた様式が形成され発展した時代には、予型論を主題とし、旧約と新約の対応関係を扱う美術作品の数が急増する。とくに聖堂などの建築では、その空

間に配置された美術作品や聖遺物をはじめとする様々な事物によって構築されたネットワークによって、その場を訪れる信徒を絡め取りその身体や視線を誘導するダイナミックなプロセスを通じ、新たな思考や発見を促す展示プログラムが重要な役割を果たした。こうした展示プログラムでは、諸要素の空間的布置、形態的アナロジー、可視性と不可視性、物質性などの、キリスト教美術が伝統的に練り上げてきたリソースを活用する視覚的レトリックが見る者に力強く働きかける。彼自身が一人のキリスト教徒として時間軸上に位置づけられており、多様な予型に対応する1つの「対型」であることに留意したい。彼の存在や行為という対型によって予型は完成されるとともに、その予型論に関する認識は視覚に基づく現実の経験と一体となつて、展示プログラムを通して彼自身にフィードバックされるのである。聖堂の扉口という外壁面の下部に穿たれた開口部を通過することにより、質の異なる内部空間への移動がなされ、それまで建築の外部からは見ることがなかったものが見えるようになる過程が生まれる。扉口の周辺には、手で触れることもできるような近い距離に、石という不透明で重く地上的な物質性をそなえる素材を用いた彫像や浮彫などが、開口部を枠取って集中的に配置される。これに対し、入口を抜けて聖堂の内部に進むと、ステンドグラスという光を透過し物質性の希薄な天上的とも言える素材が支配する、広大な空間が目前に出現する。しかもステンドグラスがはめられる開口部は、聖堂の床に立つ観者からは遠く離れている。扉口を通過する者に向けて用意された彫刻が求める視覚の在り方は、内部へと進んだ段階で初めて開示される視覚の在り方を覆い隠しており、その劇的な移行や転換を効果的に演出する。聖堂の外壁や扉口に設置された彫刻が表す主題と、内部空間で初めて見ることが可能となるステンドグラスの主題が重複することがしばしばあるのも、外部と内部を同時に見ることができないとともに、素材による視覚の質の相違が関わっている。ヴィジュアル・タイポロジーは、それ自体が救済に至る大きな物語の一部をなしていたと理解すべきである。つまり、フィグーラによって歴史を捉えることができるという事実自体が、身体的視覚に拘束され、そのような霊的なまなざしの可能性を奪われている旧約の民やユダヤ教徒とは本質的に異なり、キリスト教徒であることの証左であった。それゆえ、このまなざしを活用し実践することが、その主体となる者を大きな物語へ組み入れていく手段となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

木俣元一「パリとゴシック様式の形成」、『美学美術史研究論集』27巻、2017年、pp. 73-81(査読有)

木俣元一「シャルトル大聖堂における展示プログラム—聖遺物・聖体・ステンドグラス」、『Heritex』2巻、2017年、pp. 110-121(査読無)

木俣元一「ゴシック聖堂の展示プログラムとヴィジュアル・タイポロジー」、『学士会報』928巻、2018年、pp. 21-25(査読無)

〔学会発表〕(計10件)

木俣元一「「展示プログラム」としてのゴシック聖堂」公開セミナー「聖なる場におけるイメージと「もの」」(2015年7月11日、名古屋大学)

木俣元一「シャルトル大聖堂の聖遺物とステンドグラス」招待講演(2015年7月31日、京都国立博物館)

木俣元一「Le "voile du temple (velum templi)" dans les diagrammes circulaires de l'Hortus deliciarum」招待講演(2015年12月2日、フランス、ストラスブール大学)

木俣元一「The Programme of Display at the Chartres Cathedral: Relics, Eucharist, Stained Glass」国際シンポジウム「The Materiality and Imagery of the Sacred in Medieval Japan and Europe: Buddhism, Shinto, Christianity」(2016年3月1日、ドイツ、ハイデルベルク大学)

木俣元一「ゴシック聖堂の展示プログラム」シンポジウム「礼拝空間—超越者と対峙する場の創造」第69回美術史学会全国大会招待講演(2016年5月28日、筑波大学)

木俣元一「パリとゴシック様式の形成」シンポジウム「西洋中世の知的中心としてのパリに、何が生じていたのか」西洋中世学会第8回大会招待講演(2016年6月12日、東北大学)

木俣元一「Between Codex and Architectural Space: from the Hortus deliciarum to the South Transept of Strasbourg Cathedral.」国際シンポジウム「Religious Space, Ritual and Memory」(2017年2月5日、名古屋大学)

木俣元一「Between the Codex and the Religious Space: From the "Hortus Deliciarum" to the South Transept of the Strasbourg Cathedral」国際シンポジウム「New Insights into Manuscripts and Printed Books in Early-Modern Japan」(2017年3月9日、ドイツ、ハイデルベルク大学)

木俣元一「中世キリスト教美術におけるスボリア」公開シンポジウム「《古典とは何か》古代中世西洋美術研究におけるアプローチ」(2018年1月27日、名古屋大学)

木俣元一「Reading the Window of saint Leobinus at Chartres Cathedral」国際シンポジウム「The Materiality of the Sacred

Text」(2018年3月2日、ドイツ、ハイデルベルク大学)

〔図書〕(計1件)

木俣元一、小池寿子『西洋美術の歴史 中世 ロマネスクとゴシックの宇宙』(2017年、中央公論新社、総ページ数 670)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木俣元一 (KIMATA, Motokazu)
名古屋大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：00195348

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()